

## シリーズ3、富山で育つ宿根草の組み合わせとデザイン⑤

職藝学院

オミナエシ

教授 渡邊美保子

オミナエシは秋の七草の一つです。現存する日本最古の歌集である『万葉集』にも詠まれているほど、日本人に長く親しまれてきた宿根草です。現在では、自生しているオミナエシを見ることが大変難しくなりました。富山ではレッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。南砺市立野ヶ原にある桜ヶ池の堤防の斜面では、オミナエシの自生地を復活させる活動が行われているそうです。

オミナエシは、たくさんの小花が集まって、レモン色の傘を何本も開いたような姿で咲きます(写真1)。小花は3mm位で、よく見ないと、ただの黄色い粒の集まりのように見えます。つぼみは風船のようにぷくっとふくらみ、ぽんっと割れて5枚の花びらを開きます。初夏から初秋にかけて開花をひたすら繰り返します。そのため、開花期間はとても長く、7月から9月の終わり頃までです。花が開く音が聞こえるとしたら、オミナエシほどにぎやかな花はないでしょう。草丈は1m前後で、背丈が高くなるわりには倒れにくい丈夫な茎を持ちます。



写真1 オミナエシの花。花を付ける茎も黄色に色づく。9月中旬。

オミナエシは1本植えると、次の年には2本から3本の花茎を伸ばします。今年咲いた茎の根もとから次の年に咲く新芽が伸びてくるので、少しずつ地面を移動しながら次の命をつないでゆきます。オミナエシの茎に付いた葉は、鳥の羽を広げたような切れ込みがあります。一方、親株の根もとから地面を這

うように伸びてくる地下茎の先にできる葉は、毛の生えた小松菜のような形をしています。冬になると花茎はゆっくりと黄土色になり枯れてしましますが、地下茎の先から伸びた葉は枯れずに冬を越します。雑草によく似ていますので引き抜いてしまわないようにしましょう。これが、次の年に咲く子株になります。放射状に広がる子株の葉っぱをめくると、地下茎が地表面にむき出しになっています。そのため、日差しが強すぎて乾燥する場所や、水はけが悪い土では子株の数が増えないようです。植え付け前は、完熟の腐葉土や牛糞堆肥などをすきこみ、水はけの良い土作りをしましょう。

広い敷地を持って余している方は、イトススキとオミナエシの組み合わせをおすすめします。オミナエシの後ろに、草丈が1.5m位になるイトススキを植えると、オミナエシの草姿が際立ちます。まるで緑色の屏風の前にオミナエシの花が飾られているような姿になります(写真2)。オミナエシは西日や乾燥を嫌います。そのため、イトススキを南西側に植えて、その手前にオミナエシを植えましょう。オミナエシは、イトススキが強い日差しや風をさえぎってくれるので機嫌が良いようです。



写真2 手前からアオイロフジバカマ、オミナエシ、イトススキ。8月中旬